市内の戦跡を歩く6

沖縄戦終結から67回目の夏がやってきました。今回の「戦跡を歩く」では、男子学徒の慰霊碑を紹介します。沖縄戦では、師範学校や中学校に在学中だった10代の若者たちも、学校ごとに鉄血勤皇隊や通信隊として動員され、多くの命が犠牲となりました。

これまでの過去5年分の「慰霊の日特集」記事は糸満市のホームページでご覧になれます。沖縄戦における糸満市の情報をお知りになりたい方は、「糸満市史　資料編7　戦時資料上巻」、「同下巻」（生涯学習課文化振興係で発売中）をお読みください。

① 翔洋碑

沖縄戦で犠牲となった県立水産学校の学徒・教職員・同窓生66名を祀る。

鉄血勤皇隊として動員された27名は、引率教員2名とともに恩納岳の第4遊撃隊に入隊。情報収集や食料運搬に従事する。久志岳へ移動するが、米軍の激しい攻撃に遭い、1945年7月16日に部隊は解散。その後も生徒らは山中をさまよい歩き、捕虜になったのはしばらく後のことだった。生徒11名が死亡。引率教諭1名は配置先に向かう途中に行方不明（死亡）。

通信隊は引率教諭なく、第32軍司令部に集まった本科1、2年生21名により編成。監視業務と情報収集に従事。砲弾が落ちる中、米軍機の飛来数や船舶数の報告任務、切断した電話線の修復、集まった戦闘情報や伝令を指令室に報告する任務を担った。首里から南部撤退後も司令部と行動を共にし、斬り込み隊へ駆り出されるなどして生存者は1名のみ。

1962年12月に那覇市泊の琉球政府立沖縄水産高等学校敷地内に「沖縄水産健児之塔」を落成。1978年3月、糸満市への学校移転に伴い、「翔洋碑」と改称して現在地に慰霊塔が設置された。

所在地は西崎1丁目1番地の1　沖縄水産高校敷地内西側。

② 開南健児之塔

戦前の沖縄で唯一の旧制私立中学校だった開南中学校の学徒・教職員・同窓生を祀る。

鉄血勤皇隊には4～5年生（24～5名）が入隊予定であったが、激しい空襲によりまとまって入隊することが困難となり、各自で部隊へ向かった。入隊先の第62師団独立歩兵第23大隊は、宜野湾から浦添で激しい戦闘を繰り広げた部隊で、同部隊に入隊したと思われる学徒は全員死亡。そのため、実際の入隊数やその後の様子など詳細不明となっている。

通信隊要員の適性検査に45名が合格。12名が字大里の大城森に駐屯していた第24師団司令部へ配属。家族との面会で一時帰宅後に、部隊と共に首里へ移動。無線部隊は首里久場川や石嶺付近の戦闘状況を本部へ送信。大城森へ撤退後に真栄里集落西側の大隊へ配置換えし、さらに国吉集落西側の大隊へ配置換えされ、敵陣地への斬り込みが命じられるが失敗。1945年8月末まで逃げ延びたのちに米軍に収容される。同校は戦後に再開することがなく、創設9年で廃校となる。

所在地は字山城574番地。平和創造の森公園東側。「因伯の塔」向かい。「魂魄の塔」から南西に約170メートル。

③ 沖縄工業健児之塔

沖縄戦で犠牲となった県立工業学校の学徒や教職員を祀る。1945年3月23日に首里城へ集合して鉄血勤皇隊を結成する予定であったが、空襲のために実現せず。また、石部隊へ約30名が入隊予定であったが、詳細の連絡がないため一時帰宅。帰宅せずに残った校長以下4名の教職員と3名は近くの部隊の壕掘作業へ協力。南部撤退後、2名の教員を除く校長以下5名は召集令状により輜重兵第24連隊に入隊。壕の修理や炊事、糧秣運搬などに従事。6月7日、トラックで真栄里に移動後、同地で校長ら教職員2名が除隊となり、学徒3名は与座方面の戦闘に参加したようだが詳細不明。2年生の内、通信隊要員に合格した生徒は有線・無線・暗号班に分かれて、一中生徒ともに首里金城町の民家で分宿して訓練を受ける。76名の生徒が無線班42名・有線班14名・暗号班20名へ分かれて第5砲兵司令部通信隊へ入隊。3～4名に分かれて浦添や豊見城の各部隊へ配置。通常の業務以外に飛び交う砲弾や米軍機の中、雑務を行っていた。同部隊は南部撤退後、摩文仁岳中腹の割れ目に有線班と暗号班、現在の工業健児之塔裏の自然壕に無線班とで分かれて避難。炊事場としていた民家で砲撃を受けて、学徒9名が即死。米軍に包囲される中、斬り込みから突破命令へと変更され、学徒には攻撃用と自決用の手榴弾がそれぞれ1個渡される。米軍に見つかった際に手榴弾に手を掛けたことで攻撃されて戦死した学徒もいる。

所在地は字摩文仁620番地の2。県平和祈念資料館東隣。字真壁出身学徒の「金城勝の追悼碑（仮称）」が公園内「島守の塔」敷地の階段を上り右手奥に立つ（2011年6月広報紙参照）。

④ 沖縄師範健児之塔

教員養成機関であった沖縄師範学校男子部から動員され、沖縄戦で犠牲となった教師19名と学徒隊226名を含む同窓生290名を祀る慰霊碑、1950年建立（写真左）。米軍が沖縄本島へ上陸する前日の1945年3月31日に全職員生徒へ防衛召集。386名の学徒は陸軍2等兵の身分を与えられ、25名の教職員と共に動員された。学徒は「師範隊本部」「千早隊」「斬込隊」「野戦築城隊」に分けられ、負傷兵の治療の補助、陣地構築、炊事、立哨、情報収集や伝達などの任務を担った。戦争が激しくなると各隊（主に野戦築城隊）から隊員を抽出して「特別編成中隊」を編成し、司令部の警護や首里撤退時の先遣隊、対戦車急造爆雷の運搬などに従事させられた。それぞれの隊では摩文仁撤退後も弾雨の中、伝令や水汲みなど危険な任務を行っていたが、残存兵とともに斬り込みを命令された学徒もいた。また「敵中を突破して北部へ行き再起を図れ」との解散命令により、数名単位に分かれて壕から脱出を試みた学徒も米軍の掃討戦により多くが犠牲となった。

「沖縄師範健児之塔」の後方には、1946年3月に金城和信氏により建立された「健児之塔」（写真中央）や沖縄師範学校の生存者や関係者により、友情・師弟愛・永遠の平和を3名の学徒により表した「平和の像」（写真右）が並立して設置されている。

所在地は字摩文仁548番地。平和祈念公園の西側。慰霊碑後方の壕内に「健児之納骨堂」がある。

市内の戦跡を歩く6

僕たちと変わらない年だった学徒隊に思いを馳せて

戦跡を歩く

5月12日、「市内の戦跡を歩く6」（8～9ページ）で紹介した戦跡を、三和中学校の2年生4名が歩き、そこにまつわる話を聞き、学徒隊に思いを馳せ、感じたことを綴ってもらいました。

学徒隊と同年代の彼らが感じた、学徒隊のこと、戦争のこと、平和のことなどの思いを紹介します。

1) 「沖縄師範健児之塔」で市職員から説明を聞く生徒／2) 「開南健児之塔」で石碑に刻まれている人数を数える生徒／3) 「沖縄工業健児之塔」で市職員から説明を聞く生徒／4) 「6」の階段を上り右手奥に立つ「金城勝の追悼碑（仮称）」／5) 「沖縄師範健児之塔」後方の壕内にある納骨堂／6) 平和祈念公園内にある「島守の塔」近くの階段

戦争は一体誰を幸せにしたのか

金城知樹さん
（三和中2年）

僕たちが生まれた沖縄は、今から67年前、3人に1人が死んだといわれるほど悲惨な戦争が繰り広げられました。

過ちを二度と繰り返さないため、僕たちは何度も戦争と平和について学習してきました。

学習をするたびに、はっきりとしない、心のどこかでくすぶるような疑問が残っていたのですが、それが、今回戦跡を歩いたことでやっとはっきりしました。それは、「戦争は一体誰を幸せにしたのか」ということです。

戦争は子を奪い、家族を奪い、人の未来までも奪う。一体、戦争は誰を幸せにしたのでしょうか。

傷つき、死んでいった人たちは、誰のために傷つき、死んでいったのでしょうか。

そしてもう一つ、あらためて痛感したことがあります。

「いつだって、人間の一番の敵は人間なんだ」と。

戦争は卑劣で憎しみを生む

竹島羅衣さん
（三和中2年）

僕は、糸満の戦跡を歩いてみて、戦争は醜く、卑劣で、憎しみを生み出してしまうものだということを、あらためて実感しました。

最初は、沖縄水産高校で翔洋碑にまつわる話しを聞きました。

次に、開南健児之塔に行きました。開南健児之塔には、約300名の名前が刻まれている石碑がありました。罪もなく死んでいった人がたくさんいることを知り、かわいそうに思いました。

学徒隊は、6月に解散命令が出たのにもかかわらず、最後の最後まで兵隊と行動を共にし、とてもかわいそうだなと思いました。

僕はこのような醜い戦争は、二度と起こらないようにと祈っています。

学徒隊は兵隊でもあった

久保田修平さん
（三和中2年）

僕が、糸満の戦跡を歩いて感じたことは、戦争の時はいろいろ大変だなと思いました。

まず最初に行った沖縄水産高校の翔洋碑は、以前は那覇にあったそうで、その後ろの方にあった碑が最初に造られたと聞き、今もしっかり保存されているんだなと思いました。

次に行ったのが開南健児之塔です。ここの石碑に刻まれている生徒たちは、最後は兵隊となった人もいることを知り、かわいそうだなと思いました。

次に、沖縄師範健児之塔で話を聞きました。この学校の生徒はとても優秀だったそうで、すごい人がいっぱいいたんだろうなと思いました。

最後に、学徒隊は6月に解散命令が出ていたのに、最後まで兵隊と行動を共にし、とてもかわいそうだなと思いました。

戦跡を歩き感じた「なぜ」

山城克貴さん
（三和中2年）

僕は、この体験で慰霊碑やお墓を見て、なぜ、このようなものが造られたのだろうと思いました。

沖縄水産高校の付近では戦闘がありました。なぜ、沖縄水産高校だったのだろうと思いました。

なぜ、慰霊碑の周りには石が置かれているのだろうか。戦時中はみんなは何を食べていたのだろうか。なぜ、ガマの中は寒く、水が垂れているのだろうか。

僕は、戦争のない今の日本に生まれてきてよかったです。